



「戦時下国策紙芝居と大衆メディアの研究」班 台湾訪問・資料調査報告

鈴木 一史

(非文字資料研究センター 研究協力者)

はじめに

かつて日本の一部だった地で、戦時下に作られ、演じられた紙芝居には何がどう描かれたか。そして誰が、いかに広め、作品に接した人びとは何を感じたか。「戦時下国策紙芝居と大衆メディアの研究」班（以下、「研究班」）は、主に戦時下の日本で作られた紙芝居を対象に、旧植民地を含んで作品の所在を明らかにしてきた。また作り手や演じ手など紙芝居にかかわった人びとの足跡にも目を配りながら、当時の紙芝居のありようを考察してきた。

旧植民地における紙芝居の調査を進めるなかで 2022 年 5 月、非文字資料研究センター（以下、「センター」）は国立台湾歴史博物館（以下、「台史博」）と学術協定を結んだ。これは台史博の資料を活かした研究を進めるためのもので、2023 年 2 月には台史博が所蔵する紙芝居の一部を「植民地台湾の紙芝居パネル展—国立台湾歴史博物館コレクション」（於神奈川大学みなとみらいキャンパス プロムナード及び体験・展示エリア）において紹介するとともに、公開研究会「植民地台湾の紙芝居—国立台湾歴史博物館コレクションからみえてくるもの—」を開き、連携を深めている。

このたび協定期間の 3 年間延長を記念して、研究班をはじめとする以下メンバー（敬称略、順不同）は 2023 年 9 月 14 日（木）から 17 日（日）にかけて台史博を表敬訪問するとともに、高雄市立歴史博物館で資料調査を行った。本稿ではその成果を報告したい。

なお、写真は特記のないかぎり筆者撮影によるものである。また関係者の所属や役職は調査当時のもので、資料の引用に際しては旧字体を新字体に適宜改めた。

センター：後田多敦、中村裕史

研究班：安田常雄、新垣夢乃、大串潤児、鈴木一史

現地コーディネーター・通訳：邱昱翔、謝佳芸、王蕙喬

1 資料を探し、「精神史」を描く—台北での懇談

9 月 14 日（木）は台北において傅玉香（國立屏東大學應用日語學系副教授）、何義麟（國立台北教育大學台灣文化研究所教授兼所長）の両氏と懇談し、関連資料の公開や植民地期台湾の歴史にかかわる研究の現状に接した。傅氏は日本語教育専攻で植民地期の台湾における紙

芝居についての論文があり、何氏は台湾の政治史専攻で『台湾現代史』^①などの著作がある。

戦時下の台湾で発行された新聞は、『台湾新報』（1944 年統合後）より以前に発行された各紙について紙面がデジタル化されており、今後はテキスト検索も可能になる見込みとの情報を得た。また台湾において戦時下の紙芝居は戦争の宣伝にかかわったものとみなされ、戦後にその大半が焼却された可能性があること、さらに理由は不明ながら台南で中心的に広まった傾向がみられること、キリスト教の布教手段としての視点が有効であることなど、研究班の成果と重なる助言もあった。

戦時下の台湾で日本へ協力した人びとは戦後どのように扱われたかという筆者の質問にたいして、何氏は日中戦争が勃発した 1937 年以降の歴史はあまり触れられることがなく、1941 年の日米開戦以後に言及されることはさらに少ない傾向にあると答えた。また日本の統治に反対した台湾の知識人が戦時中は日本側の宣伝に協力していた場合、当人がそうした経歴を隠すこともあるという。何氏は、1940 年代に軍国主義をかかげていた知識人が、なぜ戦後は異なる主義主張をもつに至ったかを明らかにすることがこれからの課題であり、日本の統治下で教育を受けた世代の日記や聞き取りの記録をとおして、当時の台湾における人びとの「精神史」にせまる研究が行われるべきとの見解を示した。

両氏との懇談からは、戦時下の台湾についての資料公開がインターネット上で進んでいる現状を知ることができた。また戦前から戦中、戦後への連続性にも注目することが重要だという示唆を得た。今後も現地の研究状況を把握しながら考察を深めることが、研究班の成果の幅を広げるために肝要であろう。

2 たがいを知り、連携を深める—台史博への表敬訪問

9 月 15 日（金）、午前にはメンバー各自が台南の国立台湾文学館【写真 1】を見学した後、台史博【写真 2】へ表敬訪問を行った。

到着後、張隆志館長をはじめ館員諸氏の出席を得て学術連携協定書の調印が行われ、同館の資料及び研究紹介の報告と研究班メンバーからの応答の後、常設展示や台湾の人びとのあいだで広く歌い継がれてきた「地下国歌」である「望春風」など台湾の流行歌のうつりかわり



写真1 国立台湾文学館の外観

を紹介する「當我們望春風 臺灣流行音樂 90 年特展」を見学した。

張館長による挨拶では、同館が台湾政府文化部の公認機関となったことや、現在のところ台湾の歴史をテーマにした唯一の国立博物館であり、約十五万点の資料を所蔵していることが紹介された。

つづいて研究員諸氏からは次の三つの報告が行われた。

第一報告（陳怡宏氏）は「國立臺灣歷史博物館館藏乙未之役非文字資料簡介」で、1895 年の下関条約に基づく台湾割譲により出兵した日本と台湾との戦闘である乙未戦争にかかわる台史博所蔵の非文字資料（新聞、画報、地図、錦絵、石版画、従軍写真、戦争紀年物、臺灣人戦争歌謡に大別）が、画像をまじえて紹介された。主な内容は、戦場の様子を題材にしたものや反抗する軍の様子、現地の風土や建築、人びとの様子を描いたものだという。これらの資料への考察を深めるためには、事実にとれほどに基づき作られたかということや、資料の背後にある意義を推しはかること、そのイメージがどう流布し、参照されたかを調べることで、また誰がその資料に接したかを知ること、「視覚政治」（イメージの伝播による政治的な宣伝、あるいはイメージのもつ政治性といった含意と推測される）といった論点が有効であろうとの見解が示された。

第二報告（黄裕元氏）は、台湾における流行音楽の研究（聲音的臺灣史研討會）についての紹介であった。音楽や声が収録されたレコードが素材として取りあげられ、日本統治下の台湾で作られたさまざまな音源が、最近二十年ほどのあいだにコレクターの手によりインターネット上で公開されるようになったという背景が説明された。台史博ではこれらの音源をデータベース化して公式ウェブサイトで公開し、音を聴けるようにするとともに、ボランティアを募り年配者の知識を活かすことで、音源にかかわる情報を得ているとのことだった。

第三報告（張育君氏）では、馬祖列島の潮間帯での漁における伝統的な漁具（馬祖傳統蝦皮漁具）が紹介され



写真2 台史博の外観

た。「螺鈎」と呼ばれる貝の採捕に用いられる漁具、「章魚鈎」と呼ばれるタコ漁の漁具などの収集や使用者へのインタビュー調査といった取り組みについて説明があった。台湾では伝統的な漁具にかかわる調査が多くないものの、馬祖列島につづいて台湾島東北部の「東北角」地域でも同様の調査が進んでいるとのことだった。

これらの報告をふまえ、研究班の安田氏が今後の連携について総括的に応答した後、大串氏と筆者が各々のテーマを展開するコメントを行った。

安田氏は研究班の調査が、台南の末廣公学校（現・進学国民小学校）の卒業生への聞き取りから始まったことを挙げ、台南が紙芝居研究の原点ともいえる地であることを明かした。紙芝居は場面が描かれた絵、ストーリーと台詞が書かれた台本、声に出して語る演じ手、それを観る子どもがいることで成り立つ、いわば総合芸術ともいえる性質を有している。主に子どもへ向けて広められたメディアである紙芝居が戦争をどう受けとめたか、そして紙芝居に接した子ども、ひいては大人のなかにその紙芝居はどう残されたかをかんがえることが重要だという見通しを述べた。

大串氏は、台史博の報告で取りあげられた乙未戦争の資料は 19 世紀のメディアであるいっぽう、紙芝居は 20 世紀のメディアであるという違いがあり、日清戦争以降における多様なメディアの出現という広い文脈から紙芝居の歴史的な意義をとらえる視点を提起した。そして研究班が紙芝居の作品だけでなく、作り手や演じ手など紙芝居を作り、伝え、広めた人びとも注目してきたことや、旧植民地のどこで紙芝居が使われたかという空間的な広がりにも注目する必要性を説いた。さらに台湾各地での紙芝居の広がりや濃淡や、台湾の伝統的な人形芝居である布袋戯をはじめとした台湾の文化と比較する重要性にも言及した。

筆者は、紙芝居が戦争をただしく意義あることとして取りあげることで人びとを戦争に協力するよう呼びかけ、宣伝する役割を担ったとみなされてきたが、研究班では



紙芝居の作品と作り手がどのような論理と心理によって、いかなる筋道で戦争を位置づけたかを重んじて研究を進めてきたことを説明した。大切なのは、紙芝居を作った人、読み聞かせた人、観た人と戦争とのかかわりを、賛成か反対かという区分けのみにたよらず探ることにほかならない。こうした見方は、かつて日本の植民地であった台湾における紙芝居のありようについて考察を深めるときにも活かそう。台湾が日本に治められていたこと、そして日本がたたかっていた戦争を台湾の人びとがどうまなざしていたかを理解することが重要である。その際には、国共内戦後の国民党による統治や二・二八事件など日本とは異なる戦後のあゆみ、あるいは台湾で親しまれていた文化とのかかわりにも目を向ける必要がある⁽²⁾。こうした視点から連携をすすめることで、戦時下における植民地のありようについて理解を深めることにつながるという見通しを述べた。

研究者同士が連携することは、それぞれが自身の考察を深めつつ、各々の積み重ねの上にたどりついた地平を共有しながら、それぞれの見方や知識を組み合わせて新たな視点を拓くことで、はじめて意義あるものとなる。そのことを改めて確かめることができた交流だったといえよう。

3 戦果を伝え、奮起を促す—高雄市立歴史博物館所蔵の紙芝居作品調査

9月16日（土）は高雄市立歴史博物館【写真4】で、同館が所蔵する紙芝居について、研究部の江麗華氏の協力を得て調査した。終了後は、台湾における紙芝居活動の拠点のひとつであり、2015年に研究班がはじめて台湾を訪れた際に調査した末廣公学校や、1932年に日本の資本により開業し、現在も同じ建物で営業している林百貨店などを見学した。

高雄市立歴史博物館が所蔵する紙芝居は全五枚で、目録上は「《ニュース紙芝居》第一輯（新聞連環畫劇）」とされている。いずれも印刷紙芝居で、うち二枚は片面に

カラーの絵が、三枚には白黒写真が印刷されている。絵や写真の反対面に文字が印刷されていたものの、作品名や発行者、発行時期など作品の特定に直接つながる情報は確認できなかった。なお、一枚は文字面に日本語のみ、四枚には日本語と台湾語が併記されている。

絵が描かれている二枚のうち一枚【写真5-①、②】（同館の資料番号 KH1999.004.117-6。以下同様）は地面に置かれたナイフとそれに伸びる手が描かれており、左下端には「⑨」と印字されている【写真5-①】。文字面には日本語と台湾語が記され、右端中央に「20」の数字とともに解説が記されている【写真5-②】。解説の内容は、人が近づく気配に気づいた少年・陳忠が自身の気配を隠しつつ、ナイフを握りしめて鋭い目で見張る様子が書かれている。

もう一枚【写真6-①、②】（KH1999.004.117-7）に描かれた絵は交番の前とおぼしき場所で、官憲に支えられ松葉杖をつく和装の少年とその後ろに別の少年らが立ち、同じく和装の男性が少年に話しかけており、左下端には「③」と印字されている【写真6-①】。文字面には「4の説明」と題された文章があり、一郎という人物が照夫という人物に金銭の使いみちを尋ね、照夫が「鉄兜とサーベルを買はふと思ふんだ。兵隊ごつこのとき代り番こに使はふよ」と応えると皆が喜ぶ。兵隊ごつこで部隊長の役を一度やりたいと言う照夫に、周りはいつとも照夫がやればいいとすすめるも、照夫は自身が買う鉄兜とサーベルを持つ人が部隊長の役をやればいいと応じている。右側下に「3」の数字が印字されており、この一枚だけが日本語のみの印刷である【写真6-②】。

以上の二枚は登場人物や文字面での番号の記し方が異なるため、それぞれ別の作品の一部だと推測される。注目に値するのは後者の作品であろう。兵隊ごつこの道具を買うので部隊長役を演じたいと望む照夫にたいして、周りの子どもは道具を買った者がやればいいと認め、けれども照夫は順番に演じればよいと公平性を優先した。



写真3 台史博の館員諸氏とセンターからの訪問メンバー（中村裕史氏撮影）



写真4 高雄市立歴史博物館の外観



写真5-① 地面に置かれたナイフとそれに伸びる手が描かれる。

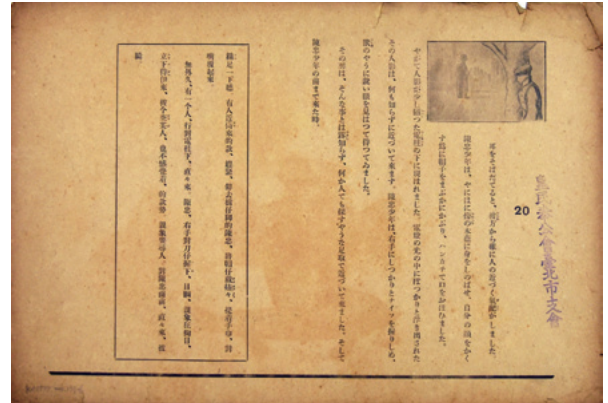


写真5-② 陳忠が自身の気配を隠しつつ、ナイフを握りしめて鋭い目で見張る様子が記される。



写真6-① 官憲と少年たち、和装の男性が描かれる。



写真6-② 兵隊ごっこをめぐるやり取りが記される。

戦争をつづけ、勝つことがすべてにおいて優先される社会で、自分の望みを貫くことは難しかったであろう。しかしみずからが属する集まりに貢献するならば、自分の欲望を遠慮がちにではあっても表明することができる。ただしそれは、あくまで皆が平等に優越感を得られるよう配慮し仕組みをつくることにおいてのみ許された。兵隊ごっこをめぐる子どもたちのやり取りからは、戦争があたりまえだった時代において、欲望はいかに、どこまで表すことがかなうものだったかをうかがえよう。

つづいて、写真が印刷された三枚をみていこう。一枚目【写真 7-①、②】(KH1999.004.117-8) は、軍を迎えて万歳をする人びとの姿をおさめた写真であり、番号の記載はない【写真 7-①】。文字面には「十五、英領ボルネオ・ルトンの製油所」と題され、日本の進出により「曾ては、英国アジア艦隊の燃料補給所として使はれてゐたこの製油所も、今はきつぱり手を切つて我が軍の為に活躍してゐる」と紹介されている【写真 7-②】。

二枚目【写真 8-①、②】(KH1999.004.117-9) には製油所とおぼしき写真が印刷されており【写真 8-①】、文字面には「十六、ビルマの首府ラングーン爆撃」という題のもと、陸軍航空隊が 12 月 23 日にビルマのラングーンを爆撃して「敵の重要な軍事施設を片端から

叩き壊した」と戦果が示されるとともに、「今將に爆撃に行かんとする荒鷲の頼母しい姿を見よ」と飛行隊を誇る文章が記されている【写真 8-②】。

三枚目【写真 9-①、②】(KH1999.004.177-9) は行軍の様子をおさめた写真が載せられており【写真 9-①】、文字面は「二十、ソロモン海戦」と題して海戦の日付と戦果が紹介されている。また「我々は過ぎし一年の戦果を、まのあたり見たのであつた。今後も益々あがるであらう」と戦局のゆくえを見通すとともに、こうした戦果は「一身を君国に捧げて血みどろの戦ひを続けてゐる皇軍将兵の労苦」があつてこそであり、銃後にある者は「皇軍と歩調を共にし、命を捨て、増産に貯蓄に真剣な努力を払はねばならない。(終り)」としめくられている【写真 9-②】。

これら三枚は写真の内容が同じであることから、台史博に所蔵されている『大東亜戦捷譜』(同館での資料番号は 2019.031.0290) と同作品の一部であると推測される。また「過ぎし一年の戦果」という一節から、太平洋戦争開戦一年後の 1942 年頃の制作であることがわかる。いずれも日本軍が進出した東南アジアでの戦果を宣伝するとともに貢献した兵士をたたえ、ひるがえって戦地にいない銃後の人びとに協力を呼びかける内容と



写真7-① 軍を迎えて万歳をする人びとの写真

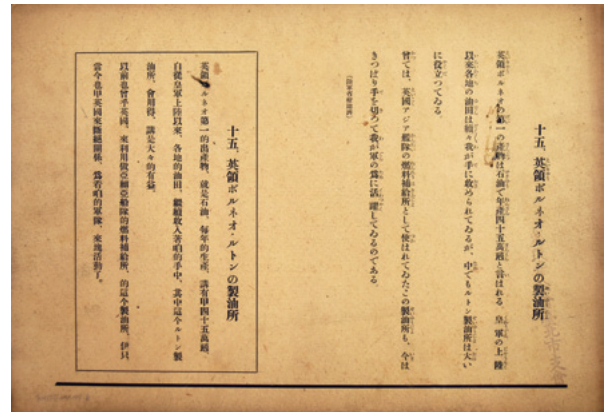


写真7-② 「十五、英領ボルネオ・ルトンの製油所」の説明



写真8-① 製油所とおぼしき施設の写真

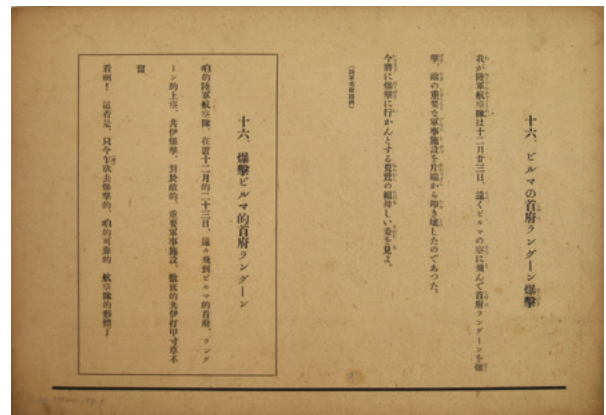


写真8-② 「十六、ビルマの首府ラングーン爆撃」の説明



写真9-① 行軍の様子をおさめた写真

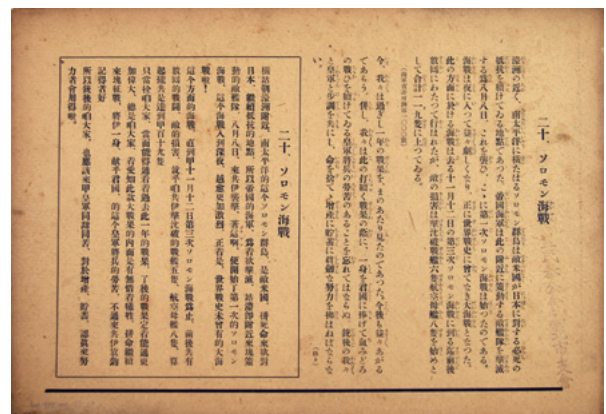


写真9-② 「二十、ソロモン海戦」の説明

いえよう。とくに「皇軍と歩調を共にし……増産に貯蓄に真剣な努力」を求めるという一節には、直接戦闘に参加していなくても、日々のくらしのなかで懸命に働き、努力することこそが戦争の勝利につながるという、戦場と銃後との一体感を強調するねらいが読みとれる。

ここで注目したいのは、絵が描かれた二枚【写真5-②、6-②】と『大東亜戦捷譜』のうち二枚【写真7-②、9-②】に「皇民奉公会台北市支会」という印が捺されていることである。1941年4月に発足した皇民奉公

会は、台湾における大政翼賛運動を担った組織で、男子青年層を中心とした訓練、農林水産業や鉱工業などの増産、銃後における生活の整備を主な目標にかかげた。同会宣伝部は、太平洋戦争の開戦以来毎月一回若しくは二回ニュース紙芝居を発行するとともに、台湾紙芝居協会の会員などに無償で配り、これらは地域の常会や会合、街頭などで上演されたという。発行された作品名に『大東亜戦捷譜』が挙げられていることや、皇民奉公会が各郡や市に支会を置いたとされていることから、今回確認

した紙芝居は同会による宣伝のために作られ、台北で使われたものとみてよいだろう。当時の台湾が南方進出の足掛かりとして位置づけられていたことからすれば、こうした紙芝居は日本が南方へ進出することのたしさをうたえとともに、台湾が戦争をつづけるための重要な拠点であることを広く報せるために使われたと推測できる。

今回所在を確認できた紙芝居は断片的であったが、戦時下の台湾において紙芝居がいかに活用されたかを探る手がかりになる資料と位置づけられよう。

おわりに

今回の訪問及び調査では、植民地期台湾の歴史についての研究や資料公開にかかわる知見を得た。また現地の博物館との連携を深める糸口をつかみ、新たな紙芝居を確認することもできた。最後に今後の研究の方向性について、若干の展望をこころみたい。

戦時下の台湾における紙芝居については、これまでの研究のなかでどのような作品が作られ、誰がどの地域で広めたかが明らかにされてきた。また当時を生きた人びとへの聞き取りから、紙芝居が人形芝居といった伝統的な文化と比べて必ずしも幅広く親しまれていなかったという傾向もみえてきた。こうした成果をふまえて、当時の台湾における紙芝居のありようをさらに深く考察するためには、台湾が日本の植民地であったという視点からのみ当時の人びとや社会をまなざさないこと、そして近代的な文化の広がり注目することが重要だと筆者はかんがえる。

台史博の常設展示において、植民地期の歴史を紹介するコーナー「現代風格起步走」で多くの面積が充てられていたのは、写真館や医院、呉服屋、劇場といった、西洋のかつ近代的な外観の建物や店舗の原寸大とおぼしきジオラマの数々だった【写真10】。そして今回調査のなかで見学した国立台湾文学館（旧台南州庁）や林百貨店【写真11】といった植民地期に造られた建物は、

現在の街並みにおいても一定の存在感を保っており、当時の内地と比べても遜色のないほどに先端的であったとされる様子をいまに伝えている。

ここで筆者が思いおこすのは、今回見学した博物館の展示において植民地期の歴史が「苦悶や不平と期待や夢の間で揺れ動きながら」⁽³⁾ あったと位置づけられていたこと、また「夢と傷、興奮と挫折」⁽⁴⁾ といった視点から紹介されていたことである。これらの説明は、陸軍特別志願兵制度や徴兵制の実施、物資の動員、同化政策など当時の日本が台湾で進めた施策を把握するのみならず、これらをもって日本が台湾に単に害のみをなした、苦しみだけをあたえたという立場をとらないことの重要性をわたしたちに伝えている。

台湾が日本の植民地であったということは、そこに住まった人びとが生きたすべての時間、あらゆる場面において、自分は大日本帝国に支配されているのだと意識し、苦しみや辛さのみをかかえて生きていたことを意味しない。そしてまた、台湾が植民地となった後に生まれた人にとっては、自分の住む地が日本の一部であることはあたりまえだったはずである。いまを生きるわたしたちにとって苦しいこと、辛いこと、恥であると感じられることが、当時の人びとにとって同じものとしてあったとみなすのは早計である。

いま求められているのは、戦時下の台湾を生きた人びとのいとなみがいかなる苦しみの中にあったかを告発し、事足りれとすることではない。あるいは日本の統治を正当化する言葉がいかに身勝手な理屈でしかなく、中身の無い偽物だったかを、現在の価値観のみから否定し去ることでない。当時の人びとがどのような場所に住まい、いかなる文化や習慣を身につけ、何を大切に、誇りを抱き、違和や嫌悪と感じたかを探りながら、紙芝居に描かれた、書かれたことの意味をとらえ、紙芝居にかかわった人びとのいとなみを知ることこそが重要ではないだろうか。たとえばそれは、台南の学校に通い、近代的な建物が建ち並ぶ街のなかを歩き、放課後には金魚



写真10 台史博常設展示の「現代風格起步走」コーナー（中村裕史氏撮影）



写真11 林百貨店の外観



すくいや木馬で遊び、マンガやニュースを観ながら林百貨店の屋上で過ごした人⁽⁵⁾が、紙芝居を観たときに何を感じたかを知ろうとすることであるといえよう。日本が台湾を植民地にした過去は、取り返しがつかない。いっぽうで、「知識人の同情から発する民衆史は、しばしば差別感・優越感の裏返しでしかない」⁽⁶⁾ ことにも注意が必要である。自分よりも恵まれない、あるいは苦しく辛い立場に置かれたとみなした人びとをかわいそうだと感じて告発し、使命感や自己満足感を道徳的に充たすことは研究とは違うのである。現在を生きるわたしたちにできることは、当時を生きた人びとの代弁をすることがかなわないことを省みたうえで、その地で、そのときを生きた人びとが紙芝居や戦争をとらえる論理と心情がいかなるものだったかを理解しようと考察しつづけることではないだろうか。資料と向かい合うだけではなく現地へ足をはこび、その地で研究を担う人びとと連携を進めるとなれば、ここに述べた考察とともに行われることで、はじめて双方の認識と連携に深化をもたらすものとなるだろう。ひいてはそれが何義麟氏の言及した、戦中から戦後における台湾の人びとの「精神史」を描くことにつながると、筆者はかんがえる。

今回の訪問と調査は、台湾において、ひいては旧植民地において、戦時下の紙芝居にかかわる研究をどのように進めるかという問いへ示唆をもたらすものだった。かわったすべての皆さまに感謝の意を表すとともに再びの訪問を期して、報告をおわりたい。

付記

執筆にあたり、研究班の新垣夢乃氏より台史博での報告内容などについてご教示いただいた。末筆ではあるが、記して御礼申し上げたい。

【注】

- (1) 何義麟『台湾現代史 二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』平凡社、2014年。
- (2) 例えばこれからの連携の方向性として、ひとつの資料に注目して台史博は台湾の文化や歴史をふまえて読み解きつつ、研究班はこれまでの成果から得た視点で読み解くといった、台史博が所蔵する紙芝居について複合的な解説を付けるようなありかたが想定されよう。
- (3) 『この土地この民 台湾の物語』常設展図録 国立台湾歴史博物館、2021年、78頁。
- (4) 『文学青年育成ガイド 台湾文学基本教材』国立台湾文学館、2021年、95頁。
- (5) 安田常雄『戦時下日本の大衆メディア研究 台湾・福岡調査報告』『非文字資料研究センター News Letter』34、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、2015年9月、21～22頁。
- (6) 池上俊一『歴史学の作法』東京大学出版会、2022年、196頁。

【参考文献】

- 橋川文三『戦争体験 論の意味』『歴史と体験 近代日本精神史覚書 (増補版)』春秋社、1968年
- 上杉允彦『皇民奉公会について (1) 植民地台湾における大政翼賛運動』『高千穂論叢』昭和六十三年度 (三)、高千穂商科大学商学会、1989年3月
- 上杉允彦『皇民奉公会について (2) 植民地台湾における大政翼賛運動』

- 『高千穂論叢』24-1、高千穂商科大学商学会、1989年6月
- 上杉允彦『皇民奉公会について (3) 植民地台湾における大政翼賛運動』『高千穂論叢』24-2、高千穂商科大学商学会、1989年9月
- 田村志津枝『台湾の大衆芸能のありさま』大江志乃夫ほか編『岩波講座 近代日本と植民地 7 文化のなかの植民地』岩波書店、1992年
- 後藤乾一『台湾と南洋 「南進」問題との関連で』大江志乃夫ほか編『岩波講座 近代日本と植民地 2 帝国統治の構造』岩波書店、1993年
- G.C. スピヴァク (上村忠男訳)『サバルタンは語る ことができるか』みすず書房、1998年
- 有馬学『日本の歴史 23 帝国の昭和』講談社、2002年
- 池田浩士『海外進出と文学表現の謎』藤井省三ほか編『台湾の「大東亜戦争」 文学・メディア・文化』東京大学出版会、2002年
- 鈴木一史・松本和樹『戦時下日本の大衆メディア研究 台湾調査報告』『非文字資料研究センター News Letter』35、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、2016年1月
- 新垣夢乃『植民地台湾の紙芝居活動についての記録と記憶—植民地紙芝居研究の射程』安田常雄編『国策紙芝居からみる日本の戦争』勉誠出版、2018年
- 飛矢崎貴規『橋川文三の思想史的研究—日本浪漫派体験と「歴史意識」論の形成—』明治大学大学院文学研究科博士学位請求論文 (未公刊)、2020年1月
- 邱昱翔『「新建設」から見た台湾紙芝居史』『非文字資料研究』19、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、2020年1月
- 和田博文ほか『帝国幻想と台湾 1871-1949』花鳥社、2021年
- 大串潤児編『国策紙芝居 地域への視点・植民地の経験』御茶の水書房、2022年